

相変わらず、霊能があると称する者が人を鑑定したり占ったりするテレビ番組がたえない。「霊」を利用した「やらせ」番組もある。その一方、伝統宗教番組がほとんど見られない。テレビは宗教をどう見ているのか。

テレビはなぜ放送基準を かいくぐり心霊番組を 続けるのか!?

Ishii Kenji

石井 研士

國學院大学教授／宗教学者

メディア新時代の宗教の試練

二十一世紀の宗教は、メディアとの関わりを抜きにして語ることができなくなりそうだ。

第一に、新聞、テレビ、CS、インターネットをはじめとする多様なメディアが供給する宗教情報は、ますます多くなっている。残念ながらそうした情報の大半は、「霊」の存在を面白おかしく扱っ

たヴァラエティ番組や、詐欺被害をはじめとした宗教団体の事件報道である。宗教を正面から見据えた良質の番組・情報はわずかである。

第二に、宗教者や宗教団体がインター

ネットやビデオ、あるいは衛星放送を利用して、自分たちのメッセージを積極的に打ち出すようになっていく。すでに教団や教会でのコンピューターの多様な利用は特別なことではない。日本社会の急速なIT化・高度情報化は宗教者や教団にも無関係ではなくなっている。

ところで、高度情報化社会というコンピュータやインターネットのみが語られるが、テレビの登場によってラジオがなくならなかったように、メディアは多層化、多様化していくのが実情である。

昭和二十八年にテレビ放送が開始されて以来五十年が経過し、平成十五年はNHKをはじめとしていろいろな機会にテレビに関する回顧や展望が行われた。テレビが私たちの生活に与えた影響の大きさは、専門家の言葉を借りなくても実感として理解することができる。「テレビのない生活」は考えられなかった、というのが大方の日本人の本音であろう。インターネットが普及しつつある現在も、

根底からこの状況が変わったわけではない。

テレビが我々日本人に与える影響の大きさについては、近年行われた複数の調査で明らかにされている。NHK放送文化研究所は平成十三年十月に「IT時代の生活時間」調査を実施した。七年前になるが、この調査によると、パソコン、携帯電話、インターネット、テレビ、ラジオ、活字（新聞・雑誌・マンガ・本）、CD・テープ、ビデオなど既存メディアの利用状況を比較すると、テレビが行為者率、時間量ともに群を抜いて多く、圧倒的に多く使われていることがわかる。

また、内閣府が平成十四年に実施した「第四回情報化社会と青少年に関する調査」によると、一日平均テレビ視聴時間は二〜三時間という人が過半数を占め、青少年にとって相変わらずテレビは接触時間が長い基幹的なメディアである。日本人にとってテレビは、きわめて重要な情報源であり、信頼することのできるメ

ディアとして存在している。

放送規制クリアーの宗教番組

テレビで放送される宗教関連番組は、おおよそ四種類である。第一は教団提供の宗教番組である。昭和三十五年頃に、ラジオでの宗教ブームを背景として、テレビでも宗教放送ブームが起こるのではないかと期待されたが、今日までそうした事態は生じていない。一時期UHF局を中心にキリスト教系の番組が多かった時期があるが、現在はほとんど放送されていない。仏教関係では『比叡の光』がよく知られているが、数年前に東京エリアでの地上波放送は終わってしまった。

また、日本テレビで昭和三十五年以來放送されていた『宗教の時間』も局側からの一方的な通告のもとに放送が中止されている。テレビでの教団放送は、ラジオと異なり明らかにうまくいかなかったのである。メディアの特性とともに、放送時間がもつぱら土曜日と日曜日の早朝も

テレビと宗教の危ない現状

表① 日本民間放送連盟『放送基準』の中の「宗教」関連規定

第7章 宗教

第39条 信教の自由および各宗派の立場を尊重し、他宗・他派を中傷、ひぼうする言動は取り扱わない。

信教の自由には、宗教を信じる自由と同時に、信じない自由も含まれる。公共的性格を有する放送でも、信教の自由の趣旨は尊重すべきであり、信仰を強要したり、他宗・他派を中傷、ひぼうすることは避けなければならない。

第40条 宗教の儀式を取り扱う場合、またその形式を用いる場合は、尊厳を傷つけないように注意する。

宗教は、個人の内面的な問題として、信念であれ情緒的反応であれ、ともかく神聖なものとして受け取られているのが実情である。

したがって、宗教の儀式を取り扱う場合は、その人々の感情を考慮し、宗教の神聖・尊厳を害するようなことがあってはならない。

また、神社・仏閣・教会、あるいは墳墓、その他、死者や死者の霊に関係あるもの、および、これらに従事する人を不当に愚弄（ぐろう）したり侮辱したりすることのないように注意しなければならない。

第41条 宗教を取り上げる際は、客観的事実を無視したり、科学を否定する内容にならないよう注意する。

宗教が信者に対して希望と勇気を与えるものであることは事実だが、だからといって近代科学を否定してはならない。

第42条 特定宗教のための寄付の募集などは取り扱わない。

新興宗教・既成宗教のいずれを問わず、番組内容として特定の宗教団体のための寄付募集は取り扱わない。ただし、募集目的が社会福祉に貢献しており、適法なものは取り扱うことができる。

第8章 表現上の配慮

第43条 放送内容は、放送時間に依りて視聴者の生活状態を考慮し、不快な感じを与えないようにする。

放送はあらゆる人々の生活に密着しているため、生活時間に依りて感情や心理を考慮し、不快な感じを与えないよう、放送時間と放送内容との関連について十分な配慮がなされるべきである。

第46条 人心に動揺や不安を与えるおそれのある内容のものは慎重に取り扱う。

正確な情報を伝えることは放送の使命であるが、情報を伝える際には、視聴者の不安をあおるような表現は極力、避けるべきである。

フィクションまたは仮説として、この種の内容を取り上げる場合にも、事実と混同されないよう十分に配慮する。

第49条 心中・自殺は、古典または芸術作品であっても取り扱いを慎重にする。

人命尊重は現代社会の基本理念である。いかなる場合でも、これを否定的に扱ってはならない。

第53条 迷信は肯定的に取り扱わない。

第54条 占い、運勢判断およびこれに類するものは、断定したり、無理に信じさせたりするような取り扱いはいらない。

現代人の良識から見て非科学的な迷信や、これに類する人相、手相、骨相、印相、家相、墓相、風水、運命・運勢鑑定、靈感、霊能等を取り上げる場合は、これを肯定的に取り扱わない。ただし、伝説を取り上げるのはさしつかえないが、その場合、誤解のないように注意する。

第57条 医療や薬品の知識および健康情報に関しては、いたずらに不安・焦燥・恐怖・楽観などを与えないように注意する。

健康問題は極めて社会的関心が高く、その人の置かれている状態に応じて反応は様々である。放送にあたってはこの点を十分注意し、大げさな表現になっていないか、期待や不安を煽っていないかなど、表現に配慮しなければならない。また、取り扱った健康情報などが、特定商品・サービスの広告活動とならないよう十分留意しなければならない。そのほか、科学を否定するような宗教的主張は慎重に取り扱うべきである。

(注)イロ文字は条文、スミ文字はその解説である。

しくは深夜に限定されたことも、視聴率の低下の一因であった。

昭和三十年代からのテレビ文化の到来の中で、宗教団体はどのような番組を放送したらいいのか、苦慮してきた。

宗教番組には放送上いくつかの制約が設けられている。現在の日本民間放送連盟の放送基準(表①参照)では、「第七章 宗教」として四項目が設けられている。

第三十九条 信教の自由および各宗派の立場を尊重し、他宗・他派を中傷、ひぼうする言動は取り扱わない。第四十条 宗教の儀式を取り扱う場合、またその形式を用いる場合は、尊厳を傷つけないように注意する。第四十一条 宗教を取り上げる際は、客観的事実を無視したり、科学を否定する内容にならないよう留意する。第四十二条 特定宗教のための寄付の募集などは取り扱わない、とされている。また「第八章表現上の配慮」の項でも、第五十三条 迷信は肯定的に取り扱わない。第五十四条 占い、運勢判断

およびこれに類するものは、断定したり、無理に信じさせたりするような取り扱いはいらない、とある。当然のことながら、教団の提供する番組が、特定の教団や宗派の一方的な宣伝であったり、予言の告知や治病儀礼のオンパレードであってはならないだろう。

こうした制約の中で、教団はさまざまな経緯を重ねてきたが、放送の困難さを実感することになった。宗教と名がつくとなかなか見てもらえない、説教調で話すと聴衆が離れていく。昭和三十五年と昭和六十年に放送されていたテレビでの宗教番組を比較してみると、放送を行っている教団数、番組数、放送時間などに大きな変化は見られない。この二十五年間に放送局も放送時間の全体量も急速に増加したわけであるから、逆に宗教番組の影響力は減ったといえることができる。

中にはテレビ放送をやめる教団も現れた。昭和六十二年に文化庁が行った調査によると、かつてテレビ放映を行ったことが

ある四十教団のうち、現在も番組を放映している教団はわずか九教団にすぎない。

利用したのほとんどが宗教が

テレビの宗教関連番組の第二は、NHKの『こころの時代』に代表されるような教養番組としての、宗教番組である。

『こころの時代』の番組内容を宗教系統別にみると、圧倒的に仏教関係が多いことがわかる。年間番組のおおよそ九割は仏教である。その他にキリスト教関係の文化人が出演したり、ごくまれに神道の祭りが放送されている。新しい宗教団体の宗教指導者が出演したり、話題として取り上げられることは皆無である。『こころの時代』以外でもNHKで放送される宗教関連番組のほとんどは仏教である。市民講座も含めると圧倒的に多い。この点ではNHKは仏教の普及に寄与しているかもしれない。民放でも宗教関連の教養番組がないわけではないが、ごくわずかである。

第三は、ヴァラエティ番組としての宗教番組である。教団提供番組の不振とは対照的に、多くの日本人が「見る」宗教番組が現れるようになった。昭和四十九年三月七日、日本テレビから『木曜スペシャル 驚異の超能力』、世紀の念力男ユリ・ゲラーが奇跡を起こす』が放送された。その後の超能力ブームのきっかけになったといわれる番組で、30%という視聴率は、日本人の関心の高さと番組の成功を示すものであった。そしてテレビは手を替え品を替えこの種の番組を作り続け、次々と新しいメディアヒーローを生みだしてきた。宜保愛子の霊視、前田和慧や織田無道の霊能力、ノストラダムスの予言、ネッシーやツチノコ等の未確認生物、UFO、ミステリー・サークル、チャネリング、Mr.マリックのハンドパワー、都市伝説、心霊写真、リングシリーズなどのジャパニーズ・ホラー、最近では現代の陰陽師、超能力捜査官、そしてスピリチュアル・カウンセラーとい

った具合である。

テレビ局はこうした番組を次々と送り出す一方で、消費し、廃棄してきた。消費し廃棄したのはテレビ局だけではない。我々視聴者もそう望んできた、ということだろう。

今年一月二十一日に放送された『ハッピー筋斗雲』での江原啓之によるスピリチュアル・カウンセリングに対する放送への苦情や放送倫理上の問題に関して設立された第三者機関・放送倫理・番組向上機構（BPO）が提言を行った。しかしながら結果は、「スピリチュアル・カウンセリングの押しつけをしない」という、番組の本質とはかけ離れた意見だった。こうした番組に歯止めはかからない。そして第四はニュース報道で、宗教に関わる事件報道のみならず、季節の行事や祭りの放送も行われていることを忘れてはならない。宗教に関する事件報道は、ワイドショーを含めて集中報道される傾向が見られる。昭和五十五年に起きたイ

エスの方舟事件をはじめとして、和歌山県での真理の友教団の神の花嫁集団焼死事件、統一教会の集団結婚式・靈感商法、オウム真理教事件、明覚寺の霊視商法事件、法の華三法行の詐欺事件、ライフスペースのミイラ事件等々、メディアは次々と事件を大写真にして見せた。平成十三年四月末からの白装束集団（バナウェーブ研究所・千乃正法会）に関する異常なまでの集中報道はまだ記憶に新しい。直近では、紀元会、摂理、神世界も報道されている。

戦後日本人の宗教意識の中で

ところで、戦後日本人は社会構造の大きな変動を被ることによって、しだいに伝統宗教に関する具体的な宗教行動や宗教意識を低下させていった。各家庭にあるのが当たり前であった仏壇や神棚は、戦後一貫して保有率を減少させてきた。現在、仏壇の保有率は全国平均で約六割、都市部で四割ほどとなっている。神棚の

保有率は全国平均で約五割、都市部では三割ほどである。年中行事を見ても、稲作儀礼を中心として神社で行われてきた年中行事は、一般の日本人の日常生活からは脱落し、仏教と関わる民俗儀礼も実生活上からは消えつつある。友引の葬儀や仏滅の結婚式、茶柱や夢見といった社会的な宗教的慣習や習俗も、現在急速に縮小しつつある。ということとは、日本人の伝統宗教に対する意識が薄れ、伝統的な宗教行動が行われなくなる一方で、ある種のメディアによる宗教情報が増大していることによるのである。

テレビ取りのテレビの宗教

宗教の情報化に関して興味深い点は、現代社会において衰退が指摘される伝統宗教に関する情報が、実はテレビでかなりの程度流通している点である。テレビで流れている宗教関係の番組は、前述したような宗教に関する事件報道、超能力

や心霊写真のヴァラエティ番組だけではなく、メディアは、我々に実生活からは消えつつある伝統宗教の行事を再生して見せるのである。季節の折々の行事をはじめ、適切な時期に全国からさまざまなお祭りや珍しい行事がお茶の間に届けられる。私たちの生活が自然のリズムから切り離されがちになり、高度情報化社会や高度大衆消費社会のなかで営まれるようにならばなるほど、私たちはテレビというメディアを通して、つまりいわゆる演出された形によって移りゆく季節を知ることになるのだろうか。

ここには我々の社会の現実と意識の変化、メディアの発達との微妙な関係が存在する。一例を挙げてみよう。大晦日にNHKから『ゆく年くる年』という番組が放送されている。紅白歌合戦が蛍の光の合唱で終わったすぐ後に、静まりかえった画面から除夜の鐘が聞こえてくる。大晦日の最後の十五分間には、毎年決まって五つから六つの寺院が映し出される。

一年の終わりを思わせる静かで感慨に満ちた光景の中、除夜の鐘が鳴り響く。そうした光景は、零時の時報と同時に一変する。初詣の参拝者で賑わう神社や、新しい年の始まりを感じさせる明るい活気のある場所が次々に映し出される。前半の十五分に神社が映し出されることはほとんどなく、新年の冒頭にお寺が映し出されることもめったにない。

大晦日のお寺の映像や除夜の鐘は、私たち日本人に「終わり」を告げている。日本人と仏教との関係を考えると、お寺＝死＝終わりを意味し、五穀豊穡や産育生育に関わる神社は、生＝始まりをイメージさせているように思える。私たち多忙な都市民は、メディアを通して一年の最後の十五分で「終わり」を迎え、新年になって「始まる」ことを望んでいるのである。メディアを通して「死と再生」を体験しているといってもいい。

『ゆく年くる年』は一年に一度の年末番組であるが、同じようなことを我々は日

虚偽放送を行ったとして視聴者によって
つるし上げられることはない。

国際コミュニケーション論を専門とする
渡辺武達は、「やらせ」を《情報送出
においてその主題の選択と全体の編集、
及びそれに関連する具体的小項目につい
て、社会的・科学的真実と異なる形で意
図的に番組制作したり、番組を脚色・演
出、ないしはレポートする、あるいは番
組内で出演者にそのように表現させるこ
と、もしくは局外者からそのような番組
制作および情報送出をさせられること、
の総称》(渡辺武達『メディア・トリッ
クの社会学』世界思想社)と定義してい
る。視聴率を上げることが至上命題とす
るディレクターと放送局が制作するヴァ
リエティ番組としての宗教放送は、この
定義に当てはまらないのだろうか。

宗教に寛容な日本人といってしまうば
それまでだが、事態はそう簡単ではない。
オウム真理教事件は、霊能者やオカルト
に関するテレビ番組が影響したという指

摘があった。直接的な影響の有無は断定
できないが、伝統宗教的慣習が日常生活
の中から脱落している現在、テレビ局が
流す靈魂観や来世観を思わせるシーンは
かなりの影響力を持ち得ることの意味は
十分に検討されなければならない。

テレビが求める「宗教」は何か

テレビというメディアの中で少なから
ぬ仏教に関する映像が流れている。テレ
ビが仏教に求めているのは何なのだろう
か。第一は、「教養としての仏教」は、
NHKの『このころの時代』をはじめとし
た番組で明らかである。神道とは対照的
に、テレビ・メディアは仏教の教義や世
界観を平易に語りかける。仏教のさまざ
まな遺跡や事跡を追いかけ、詳細なりポ
ートを紹介する。こうした中で、近年メ
ディアは瀬戸内寂聴というメディア・ヒ
ーローを生み出した。

第二は、霊を操る者の登場である。靈
魂や霊の存在を前提として、不幸の原因

を究明し、怨念や呪いを払って見せる民
衆宗教者を大寫しにしてみせる。ここで
示されるのは、視聴率をかせぐためにテ
レビ局が一方的に演出した大仰な所作や、
単純化、短絡化された仏宗の姿である。
そしてテレビは季節の移り変わりを告

知するために、全国から変わった仏教行
事を物色し見せてくれる。何の脈絡もな
く、人目を引く行事のハイライト(とい
ってしまえば表現はいいが)だけが伝統
行事として我々の眼前に展開される。

実生活上リアルな仏教を知らない現
代日本人にとって、メディアから得られ
る情報は決定的な意味を持つことになる。
メディアの中の仏教は、いくつかの明確
に異なったパターンとして存在している。
とくに影響力を持つのは不幸の原因を究
明し、怨念や呪いを払って見せる民衆宗
教としての仏教者かもしれない。こうし
たいイメージとしての仏教者像が膨らんで
いったとき、現実の仏教や仏教者は、現
代日本人にどのように見えるのだろうか。



台湾仏教の 新教団が急伸し た本当の訳

Ohmura Eisho
大村英昭
関西学院大学教授
浄土真宗本願寺派僧侶

この二月、ちょうど旧正月
明けの頃におつかってし
まったのですが、再度、台湾仏
教の実態調査をしてみたいま
した。今回は『驚異の仏教ボラン
ティア―台湾の社会参画仏教
「慈済会」(白馬社)の著者

光山寺・星雲大師と並んで講演
したこともある小生。台湾仏教
については、それなりの予備知
識はもっているつもりですが、
今回訪ねた慈済会は仏光山寺に
も増して「社会参加仏教」の、
まさしくモデルケース。なにし

た、核をなす尼僧集団の、
ことに『法華経』に依った教え
の中心となりますと意外に平凡。
日本仏教に親しんだ者からすれ

ば、学ぶところはほとんどない
といっても過言ではありません。
ですから、この程度の教えをも
って、短期間にこれほど巨大化
したことは、なるほど「驚
異」に違いありません。でも、
比較して、「長期低落傾向」を

隠せない日本の各教団に、「だ
から社会参加仏教に見習いなさ
い」などという気にはなれませ
ん。同じ僧侶とはいえ、占めて
いるポジションが余りにも違う
と言わざるを得ないからです。
実は、慈済会がしていること

は、生活合理化運動だと言って
も無理はありません。
油っこいもの好きの台湾人に
は、慈済会がすすめる菜食主義
は、健康長寿のためにも理(二
利)にかなっていませんし、手間
も銭もかかり過ぎる旧慣行通り
の冠婚葬祭からも、偉い尼僧さ
んの保証つきで苦もなく解放さ
れます。習俗・迷信のせいで無

駄遣いされていた金銭が、世界
中の可哀相な人々を救うため
に役立つのです。ボランティア
でされるゴミのリサイクル同様
人の死体ないし臓器だって「献
体」すれば有効利用できます。
もちろん葬儀は、理にかなった
慈済会式。インテリ会員の増加

で「日本初」の紹介者とされる
金子昭・天理大学教授に同行し
てもらいました。おかげで、普
通なら見えにくい奥の院(静思
精舎)の諸行事にも加わり、創
始者の証厳法師(尼僧)にも面
会することができました。
かなり以前、これも台湾の仏

る四百万人もの会員を擁し、そ
れこそグローバル(地球規模)
にボランティア活動を展開して
いるのですからネ。金子さんが
「驚異」とおっしゃるように、
当初はせいぜい三十人程度の尼
さんが集い、農作業と手芸で
細々と自活しながら修行してお

●大村英昭 1942(昭和17)年大阪市生まれ。京大哲学科卒。大阪大大学院教授を経て関
西学院大教授。宗教社会学者。浄土真宗本願寺派前住職。著書『臨床仏教学のすすめ』他。